

<空想・幻想>暦の上では2月の初旬は”大寒”から”立春”に当たりますが朝方はまだ霜と氷の世界です。ところで雪には「しんしんと降る」と形容されるような静けさを感じさせるものもあれば“どか雪”とか雪崩といった災害に繋がるような荒々しいイメージがあります。一方、霜は身に染みる朝の寒さと静寂、そして人の手では及ばない形と射す光の“不思議”がさまざまなことを想わせます。「縄帯の倅いくつぞ霜柱（一茶）」、この子は貧しいけれど元気一杯なのでしょうね。静かで凍てつく空気の中、霜柱を踏む音だけが聴こえて来そうです。身を暖かくしてよくよく見れば朝日の中で「霜柱水の匂ひの未来都市（保坂敏子）」。上の写真では霜柱の上に霜が降りていて、まさに“未来都市”かSF小説“The Lost World（失われた世界：A. Conan Doyle 著）”の入り口のような感じがします。



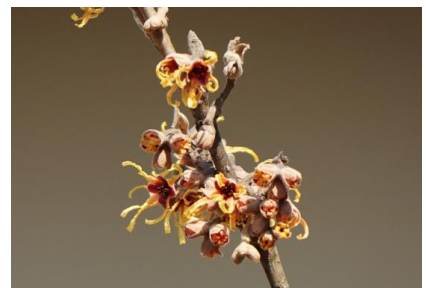
<霜柱に霜>



<小さなつらら>

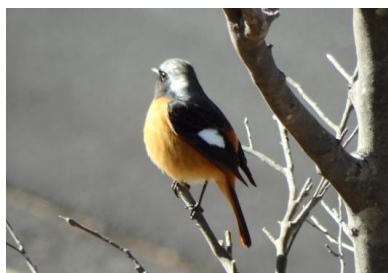
氷は光の中で垂れ下がるつららがとりわけ好いですね。「崖氷柱(つらら)よぎりて海鼠(なまこ)舟戻(大串章)」そして「大仏の鼻水たらす氷柱哉(子規)」、よほどに大きく長いつららでしょうか。SHCでもつららが見られますが実に小さくて可愛らしいものです。水面に張った氷までの距離はたかだか5cmほどですが小さいながら青が映え幻想的な感じがしませんか。

<どこかで春が>霜の世界の一方で”立春”を確かに感じさせるのがウメに先立ち花を咲かせている“マンサク”です。また、三方を雑木林に囲まれた南斜面ではオオイヌノフグリやホトケノザの花がちらほらと見られるようになりました。



<マンサクの花>

(マンサク)他の花より早く“先(ま)んず咲く”からマンサク、そして“満作”とか“万作”、めでたい漢字をあてています。



<ジョウビタキ：♀(左)と♂(右)>

たりながらじっとして時折首を回すだけです。写真のサギたちは水に足を入れていませんが見るからに寒そうです。「白鷺の片足あげる氷哉(子規)」。(文と写真：松本正勝)



<とはいえ>鳥たちにとってはまだまだ寒いようです。日が高くなってもジョウビタキはちょこちょこと飛んではすぐに羽を休め丸くなっています。アオサギ(下左)やシラサギ(下右)も日に当